

ナンブコムギの冬期播種栽培における窒素施肥法

【1 成果概要】

ナンブコムギを用いた冬期播種栽培では、基肥窒素量を 10kg/10a とします。普通畑での栽培は穂揃期に窒素を 0~2kg/10a 追肥し、初年目転換畑での栽培は穂揃期に窒素を 2~4kg/10a 追肥します。

【2 効果】

- 播種時の基肥窒素を 10kg/10a 施用すると、普通畑、初年目転換畑のいずれにおいても秋播栽培並みの収量を確保することができます(図1)。
- 圃場別の穂揃期窒素追肥の対応を下表のとおりとすることで、用途に応じた子実タンパク質含有率を確保することができます(図2)。

圃場別穂揃期窒素追肥量 (kg-N/10a)

用途	普通畑	初年目転換畑
日本めん用	0	2
パン用	2	4

注1) 用途別の子実タンパク質含有率の基準値

日本めん用：9.7~11.3%

パン用：11.5~14.0%

注2) 2年目以降の転換畑は普通畑と同様の対応とする。

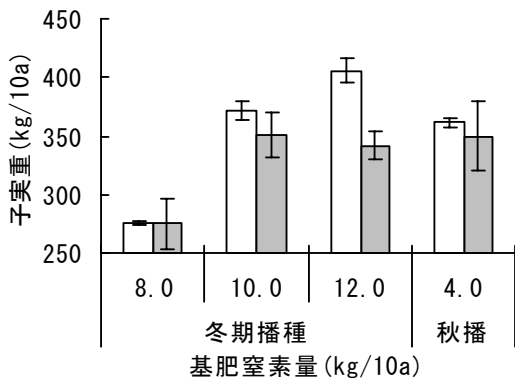


図1 基肥窒素量が収量に及ぼす影響

□：普通畑、■：初年目転換畑。播種期は、冬期播種が12月上旬、秋播が10月上~下旬とした。播種量は、冬期播種が15 kg/10a、秋播が4 kg/10aとした。

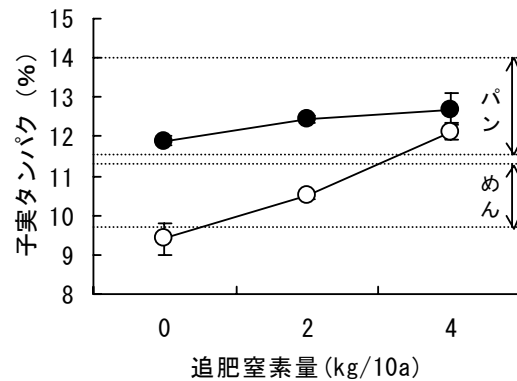


図2 穂揃期窒素追肥量と子実タンパク

●：普通畑、○：初年目転換畑。

【3 この技術を上手に使うには】

- 普通畑における冬期播種栽培は、無追肥でも子実タンパク質含有率が 11.3% を上回る場合がありますので、日本めん用の区分となっている地域は注意が必要です。
- 出穂期の葉色値により子実タンパク質含有率の大まかな傾向を把握することが可能です(図3)。
- 基肥は成分濃度の高いもの(例 N-P-K=14-28-14)を使用します。

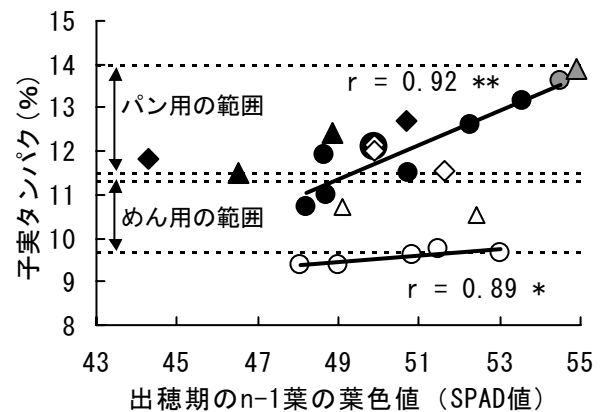


図3 出穂期の葉色と子実タンパクの関係

●○は無追肥、▲△は穂揃期 N2kg/10a 追肥、◆◇は穂揃期 N4kg/10a 追肥。黒塗りは普通畑、白塗りは初年目転換畑。

【4 技術の適用場面】

作付体系として水稻後や大豆後に小麦を取り入れている地域で、冬期播種栽培をする場合に役に立ちます。